

# しんじやうおへや

そこは、日本に似た、ある国の、死刑執行室。

部屋の片隅、床から一本の丈夫そうなロープが天井へ向かって延びている。そのロープは天井を伝って部屋の中央から垂れ下がり、その先は輪になっている。その真下の床は九〇センチメートル四方に区切られ、下方へ向かって開く仕組みになっている。「踏み板」と呼ばれる場所。

部屋のやや奥側には部屋を仕切ることが出来るようにカーテンが吊されている。そのカーテンの向こう側、一番奥の壁には3つのボタンが等間隔に設置されている。どうやら踏み板を開閉するためのスイッチになっているらしい。また、壁際の床からは一本のレバーが飛び出ており、それも3つのボタンと同様、踏み板を開閉するための装置だ。

## 第一話 回路

時間は午前一時を回ろうとしている。  
同日一〇時三〇分からの死刑執行に備えて予行演習をしている様子。

部屋には刑務官3名が立っている。処遇課長・小栗、係長・安岡、一般職員・谷田部である。

小栗                   では、カーテンを開けて、進め。

カーテンが開くと、その向こうには私服姿の死刑役の刑務官・杉宇良と、それを脇で固める一般職員4名（甲村、能野、永瀬、柏木）がおり、前方へ進んでくる。杉宇良は白布で口以外の顔を隠され、手も後ろ手に手錠をかけられている。やがて、抵抗する演技を始める。

杉宇良               おい！ やめろ！ 何でもするからやめてくれ！  
永瀬                   おとなしくしろ！

杉宇良               頼む！ どうしても最後におきたいことがあるんだ！  
柏木                   黙れ！

杉宇良               お願いだ！ 後生だ！  
永瀬                   今更そんなこと言っても無駄だ！

杉宇良               お願いだ！ 言わせてくれ！ 聞いてくれ！  
柏木                   静かにしろ！

杉宇良               俺の話聞いてくれ！  
永瀬                   もう遅い！

杉宇良               頼むから聞いてくれ！ これを言い残したままじゃ死んでも死にきれない！  
柏木                   だめだ！

甲村                   言わせてやれ！  
柏木                   え？

甲村                   いいだろ話をさせるくらい。  
杉宇良               ありがとうございます！

能野                   いや、でも甲村さん、  
甲村                   別にそれくらい問題ないだろ。

能野                   しかし、先ほど控え室の方で手紙も書き残させておりますし、それ以上のことは  
永瀬                   必要ありません。

柏木                   速やかに任務を遂行しましょう。  
杉宇良               え。

死囚がこの世に残していく言葉を、最後まで聞き届けることも、我々の任務ではないか。違うか、能野？

## しんじゃうおへや

能野

え？ あ、まあ、確かにそういう一面も、なく、もない、かも、です。

甲村

あるということだな？

能野

ええ、はい。

甲村

永瀬。柏木。

永瀬

……了解しました。

柏木

了解しました。特例と言うことで。

甲村

(杉宇良に) では三塚、特例で3分だけ時間をやる。今度こそ言い残しが無いように話せ。

杉宇良

5分……。

甲村

3分だ。

杉宇良

3分だ。

甲村

……分かりました、3分で。

杉宇良

よし。

甲村

……あれは確か、十年前のある夏の日のことでした。その日は朝からうだるような暑さで、前の晩から素っ裸で横になっていましたが、体中から汗が噴き出して止まらないので、近所のコンビニでアイスクリームでも買ってこようと思いい、財布だけを持って出かけました。

永瀬

そんな与太話、

甲村

3分待て。

永瀬

……。

杉宇良

外に出ると、さらに汗が噴き出し、意識が朦朧としながらもなんとかコンビニへとついた私は、どのアイスを買おうかと迷っているうちに、コンビニのクーラーですっかり体が冷え切ってしまい、アイスクリームを食べる気が段々と失せてきたものの、何も買わずに帰るのもバカバカしいので適当なアイスを手に取りレジへと向かいました。ところがです。

甲村

あと2分。

杉宇良

財布の中にはたったの26円ぼっちしか入っていませんでした。そんな自分を見る店員や周りの客の視線は汚物を見るそのように感じました。冷え切ったはずの身体は再び熱を帯びはじめ、手に持ったアイスを握りしめ、握りつぶし、目の前の中年女性に向かって投げつけてから店を飛び出しました。

柏木

お前……。

杉宇良

背中越しに悲鳴を浴びながら、キチガイだと罵られながら、私は走りました。それから逃れるように家に向かって走りました。しかし、どこまで行っても逃げられないような気がしてしまいました。すれ違う人たちの視線が刺さり、声が張り付き、

甲村

あと、一分。

杉宇良

俺が何をしたんだ。どうしてこうなったんだと、問いかけました。いや、叫んで回りました。しかしその叫びは周囲からのさらなる叫びにかきけされていくのです。

甲村

あと、三〇秒。

杉宇良

俺は泣きました。泣き叫びました。しかしそれすらもまた世間の風にかき消され、残ったのは「絶望」の二文字しかありませんでした……。

甲村

二〇秒。

杉宇良

やっこのことで家に辿りつき、生ぬるい水道水を蛇口から直に飲み込みながら、再び自分に問いかけた「世間は、なぜ俺をあんな目で見えるのか……!？」

甲村

一〇秒。

杉宇良

俯くように我が身を見下ろし、そこでようやく気づいたんです。ああ、そうか、

甲村

3、

杉宇良

そうか、

甲村

2、

杉宇良

俺が、

甲村

1、

杉宇良

素っ裸のままコンビニに行ったからだ！

甲村

以上か！

杉宇良

以上です！

間。

甲村、杉宇良の頭を無言で叩かれる。

杉宇良

(笑いながら) そりゃキチガイ呼ばわりされるよねー。

永瀬

能野！

能野

はい！

## しんじゃうおへや

能野、杉宇良の足を縛り始める。

杉宇良 あ！ もう一つ！ もう一つあります、言い残したこと！

柏木 後はあの世まで持つて行け！

杉宇良 次はもう少し面白いです！

永瀬 うるさい！

杉宇良 甲村さん！

甲村 もう……本当に死んじゃえよ、三塚。ていうか、杉宇良。

杉宇良 えー！ ちょっと！ ワン・モア・チャンス！ ワン・モア！ ワン・モア！

柏木 谷田部、手伝え！

谷田部 ……。

柏木 おい、谷田部！

杉宇良、喚きながらも、首に縄をかけられそうになる。と、

小栗

はい、もういいもういい！ ストップ！ ストップ！

甲村、能野、永瀬、柏木、止まる。

安岡

(溜め息) ったく、しょうがねえなあ。

(呆れつつ) 「ワン・モア」じゃないですよ。

能野 笑い堪えるの必死でしたよ(笑)。

杉宇良 とりあえず、あの、顔の布外してもらってもいい？

甲村 お前、しばらくそうしてろよ。

杉宇良 おい！

小栗 いやいや、杉宇良の外してやれ。

柏木 はい。

杉宇良の顔の白布と、足の縛りを外す。

甲村

お前、さっきの話何なんだよ。

杉宇良

いや、即興で必死で考えながら喋ってたんだけど。

甲村

即興にしてもくだらなすぎる。

安岡

大体、素っ裸で外出た時点で気づくだろ。

能野

そうですよねえ(笑)。

杉宇良

いや、分かんないですよ？ 人間、いっつどんな間違いを犯すかなんて分かりませんよ。だって俺、

柏木

間違いの次元が低すぎますよ。

能野

え、コーラと醤油って、え、間違えて醤油飲んじゃったんですか？

杉宇良

いや、逆、逆。醤油と間違えてコーラを冷や奴にぶっかけたの。

小栗

コカ奴か。

杉宇良

いえ、ペプシ奴でした。ペプシ奴NEXTでした。

安岡

低カロリーじゃん(笑)。

杉宇良

意外とデザート感覚でいけるんだよ。

柏木

それ、食ったんですか？

杉宇良

食ったよ。口の中で豆腐がはじけるはじける。

能野

踊る踊る。

永瀬

バカすぎるでしょ！

谷田部以外、笑う。

谷田部

(周囲に当てつけるように) ……ほんっと、バカですね。

能野以外、笑うのを止める。

能野

あはは……(笑っているのが自分だけなのに気づき) あ、すいません。

安岡

……ま、話の内容はさておき、対処としてはまあ、大体さっきの感じでいいんじゃないか？

甲村

はい。

## しんじゃうおへや

柏木　　そうですか？ あんまり話聞いてたりしたら、際限なくなりませんか？  
安岡　　だから甲村さんが言ったみたいに、2分とか3分とか、その程度の猶予を与えるならいいんじゃないか？  
能野　　そうですね。

永瀬　　猶予なあ……でも、  
谷田部　　僕は無駄だと思いますが。  
永瀬　　……無駄とまでは私は言わないですが、やはり速やかに遂行すべきだと思いますがね。猶予なら十分与えてるはずですから。この部屋に入る前に。  
能野　　それも分かりますけどね……。

安岡　　（小栗に）どうしましょうか？  
小栗　　……甲村の考えも分かるが、この部屋に入ったら速やかに執行するのが原則だ。わずかな時間であっても本人の希望で執行作業を遅らせるわけにはいかない。そこは無視すべきだと考える。  
甲村　　……そうです、ね。

安岡　　では、何を言われても無視と言うことで。  
一同　　はい。

小栗　　じゃあ、もう一回やるぞ。いい加減最後まで行くぞ。  
杉宇良　　まだやるんすか？

小栗　　最後までスムーズに通せてようやく終わりだ。  
能野　　すいません、今何時ですか？

安岡　　現在、1時8分。  
小栗　　2時間以上になるな。さ、しつかりやるまで帰れんぞ！

谷田部　　（溜め息）  
柏木　　杉宇良さん、頼みますよ。

杉宇良　　え、何を？  
永瀬　　ちゃんと執行されてください。

杉宇良　　ちーす。  
安岡　　死刑囚の気持ちでな。

杉宇良　　いや、それは無理無理。  
甲村　　課長。

小栗　　ん？  
甲村　　永瀬が少し疲れてきているみたいなんで、私と役をチェンジさせていいですか？

永瀬　　え？ いえ、大丈夫ですけど。  
甲村　　いいから。

小栗　　はあ。  
甲村　　じゃあ、そうして。  
甲村　　はい。

杉宇良、甲村、能野、永瀬、安岡はカーテンを閉め、その奥に待機する。

小栗　　では、カーテンを開けて、進め。

冒頭と同じように、カーテンを開け、刑務官たちが登場する。  
今度はずくに杉宇良が抵抗し始める。

杉宇良　　おい！ やめろ！ 何でもするからやめてくれ！

甲村　　おとなしくしろ！  
杉宇良　　（激しく抵抗し始め）おとなしくするからやめろって！

甲村　　やめられるわけないだろ！  
杉宇良　　頼むからやめてって！ 死んじゃうって！

甲村　　無理だ！  
柏木　　暴れるな！  
杉宇良　　いや、違う！ 脇！ 脇！ 左脇！

柏木　　え？  
杉宇良　　ちよ、放して！ 一回放して！ マジで一回放して！ マジでお願いだから！

柏木　　（動揺し）あの、課長、  
小栗　　おい！ 一旦、放せ。

職員たち、杉宇良から手を放す。

甲村、ニヤニヤと笑っている。

## しんじゃうおへや

杉宇良 ……はああ……ちよつと、甲村！  
何だ。

杉宇良 どさくさに紛れて脇くすぐるのやめろよ！  
お、ばれた？

甲村 そりやばれるよ！

小栗 おい、甲村あ！

甲村 (笑いながら)小栗課長、違うんですよ、これくらいやった方が迫真の演技が見れると思つて。  
小栗 ま、確かに迫真だったけどな。  
柏木 俺もマジで焦ったもん。  
安岡 俺も見ててちよつと焦ったよ。

一同、笑う。

谷田部一人、それを軽蔑するように眺めていたが、一言怒鳴る。

谷田部 いい加減にしませんか！

一同、静まる。

谷田部 ……何時間続けるつもりですか。  
小栗 ……谷田部。

谷田部 課長、いい加減にしましょう。

安岡 おい、

谷田部 これ、何の予行演習でしたっけ？

間。

甲村 ……少し煮詰まってきたから休憩にしませんか？  
谷田部 煮詰まった？

小栗 ……では、5分だけ休憩をとろう。

谷田部 ! 小栗課長、

小栗 休憩後、一発で決めよう。

一同 はい。

小栗 では、休憩。

小栗と谷田部と安岡以外の人間は、ガヤガヤと部屋を出て行く。

小栗 係長は……。 (と、意味深に安岡を見る)

安岡 (察知して) あ、じゃあ……私も、タバコ行ってきます。

小栗 うん。

安岡も出て行く。小栗と谷田部の二人きり。

小栗 谷田部は。

谷田部 僕はいいです。大して何もしてませんし。

小栗 うん、まあな。

谷田部 万が一暴れた時の補欠要員ですから。

小栗 補欠ってわけじゃないぞ。

間。

谷田部 ……いいですか？  
小栗 ん？

谷田部 いつもこうなんですか？

小栗 こうって、何がだ。

谷田部 なんなんですか、この緊張感の無さは。

小栗 うん、ああ。

谷田部 明日、いや、日付変わって今日か。今日、数時間後にはここで執行されるんですよね？  
小栗 そうだ。

## しんじゃうおへや

谷田部 三塚の死刑執行が行われるんですよ？  
小栗 ああ。

谷田部 こんなことでいいんですか？

小栗 いや、良くない。良くないからこうやって夜遅くまで予行演習やってるわけだろ。

谷田部 ……なんでこんなことに2時間もかかるんですか。

小栗 疲れるよなあ。

谷田部 始めから全員が緊張感もってやれば、せいぜい1時間もあれば済む事じゃないんですか!?! なんておふざけ半分でダラダラとやらせてるんですか！

小栗 そう見えるか。

谷田部 見えますよ。どう見たってそうでしょう。挙げ句に笑ってるんですよ？ ヘラヘラと。不謹慎

小栗 だとは思わないんですか、課長は。

谷田部 ……谷田部は、執行担当は初めてだったな。

小栗 そうですが。初めてですが。

谷田部 だよな。

小栗 それは何ですか。初心者も黙って見てろと言うことですか。

谷田部 黙ってるとは言わないが、未経験者には分からないこともある。お前の気持ちも分かるが、あまり気張るな。

小栗 ……。

谷田部 ……大丈夫だ。次で最後にする。時間も時間だし。

小栗 ……。課長、

谷田部 ん？

小栗 他の人と交代をお願いしたいんですが。

谷田部 交代？

小栗 ただ見てるだけは退屈です。

谷田部 谷田部、

小栗 脇を抱える役でも、足を縛る役でもいいですから、交代させて下さい。

谷田部 それは無理だ。

小栗 無理じゃありません。

谷田部 お前はまだまだ。

小栗 いずれ経験することなら、早く経験しておきたいんです。

谷田部 だから今回、チームに入ってるじゃないか。

小栗 補欠じゃないですか。ここに突っ立ってるだけの。

谷田部 ……じゃあ、教誨師の役でもやってくれ。

小栗 教誨師？

谷田部 杉宇良が死刑囚役でやってるんなら、教誨師役がいてもいいだろ。ナンマンガブでもアーメン

小栗 でもいいから祈ってやれ。

谷田部 馬鹿にしてるんですか？

小栗 ……それがいやだったら、本来の自分の役割を全うしろ。さつき柏木にヘルプされた時、なぜ動かなかった。

谷田部 あんな茶番に加わっていうんですか。

小栗 谷田部。

小栗 ……。

小栗 ちゃんと、やれ。

小栗、谷田部に背を向け、腕時計を見る。

谷田部、憎々しげに小栗の背中を見ていたが、やがてその背後へと近づき、小栗の腕を取ってひねる。

小栗 ! おい!?

谷田部 課長……。

小栗 谷田部、何してるんだ。ふざけてるのか？

谷田部 ぶざけてるのはそっちですよ。こんな態度で執行に望もうなんてあまりにもふざけてます。

小栗 落ち着け、放せ、

谷田部 まともな予行演習をやってくれるなら放します。

小栗 お前、

休憩に行っていた6人が戻ってくる。(杉宇良の手錠は外れている)

## しんじゃうおへや

甲村 (二人を見て)！何やってんだ！  
谷田部 みなさん、休憩は終わりですか。  
能野 え、何やってるの？  
谷田部 じゃあ、予行演習再開の前にちよつと聞いて下さい。  
柏木 は？  
安岡 課長、これは、  
谷田部 課長はとりあえず人質です。近づいたら、腕折ります。  
柏木 え、いや、やめろよ！

柏木、谷田部に近づく。と、谷田部、課長の腕を締め上げる。苦しむ小栗。

あ、  
こいつ、本気らしい……。  
えー……。  
……何がしたいんだ、お前。  
僕はただ真剣に予行演習したいだけです。2時間も端から見せて、みなさんのいい加減さに嫌気がさしたんで。みなさんには態度を改めてもらおうと思います。  
何？  
何言ってるんだよ、お前。  
態度を改めるって、  
谷田部君、  
そのために、まずは僕の要求を聞いてもらいます。  
お前なんか言われなくても、次は最後、気合い入れて真剣にやろうと思ってたよ。  
そんなこと言えるなら、はじめから出来るはずですよ。  
初めて補佐に入った人間が分かったような口聞くな。  
初めて補佐に入った人間にすら、馬鹿馬鹿しく思えるんですよ。さっきまでの茶番は。

甲村、谷田部に向かっていこうとするが、周りに止められる。

谷田部 甲村さん、正直ガツカリですよ。脇をくすぐって迫真の演技を引き出そうとか、あり得ませんよ。本番も三塚の脇をくすぐってやる気ですか。この中で一番経験長いのに、何くだらないことやってるんですか。

……。  
いや、くすぐられるのは苦しかったけどさ、多分、甲村はこの場を和ませようと思って、和ませる必要がどこにあるんだ！こんな予行演習に何の意味があるんだ！  
いや、谷田部くんこそ小栗課長にそんなことして何の意味があるの？文句があるんだったらそんな卑怯な真似しないで正々堂々と  
こうでもしないと僕の話取り合ってくれないじゃないですか。  
当たり前だ。初心者の言うこといちいち聞いてられるか！  
ほら。だからですよ。

谷田部、お前こんな訳の分からないことして、ただで済むと思ってるのか？  
処分が下るってことですか？  
そうだ。

それならそれで、どうぞ。  
どうぞって、  
別にそんなこと僕にとってはどうでもいいんですよ。まともな死刑執行さえ行われればそれでいいんで。それに、そういう話なら僕だって出るとこ出て、言うこと言いますよ。  
どういう意味？  
普段から、お前のそう言う態度が気に入らないんだ！  
やめろ！

甲村さん、僕はいつも至極真つ当なことを言ってるだけです。  
この……畜生！  
苦言を呈しているだけです。死刑囚に対しての態度を改めて下さい、と。  
ちよつと、言うこと言うってどういうこと？  
だから、今言ったようなことです。死刑囚に対しての不当な処遇を報告するまでだと言ってるんです。

不当って、  
特に、小栗課長、安岡係長、そして甲村さん、能野さん、杉宇良。  
え、俺だけ呼び捨て？

能野  
谷田部  
杉宇良

## しんじゃうおへや

安岡  
小栗

何の話だ。うちの拘置所で不当な処遇なんかしてない。もちろんだ。うちは虐待とかそういうことは一切無い。

谷田部、小栗の腕をさらに強くひねる。

小栗  
谷田部

痛ッ！  
逆です！ あなた方は逆に、死刑囚を無駄に甘やかしてる！ もっと言えばいいように使われてる！ 不当というか、不正と言った方がしっくり来るか。

柏木  
谷田部

どういうことだ？  
知らないんですか？ 柏木さん鈍いですね。この人達は死刑囚に頼まれて、色んなもの買いに走らされてるんですよ。お駄賃もらって。

柏木  
谷田部

は？ どういう意味だ？ 購入したいものは購買リストに書いてだから、それ以外でどうしても何か欲しければ、本だろうと雑誌だろうと、ピザだろうと寿司だろうと、この人達に手数料さえ払えるなら、何でも買ってきてもらえるんですよ、この人達に。まあ、僕はそもそも死刑囚が何か買えるようにすること自体不要だと思ってますけど。それはこの人達に言ってもしょうがないんで。

柏木

……それって本当ですか？

沈黙。

柏木

(永瀬に) 知ってました？

永瀬

……知ってた。私は、頼まれても断るけど。

柏木

そうですか……。

谷田部

それが当たり前です。

杉宇良

……別にいいじゃん、そんな変なもの買ってくるわけじゃないんだから。

永瀬

杉宇良さん……。

杉宇良

それにアレだぞ？ 上乘せったって、ちよつとだぞ、ちよつと。ほんとお駄賃だぞ？

甲村

黙ってる。

杉宇良

はい……。

柏木

これは……外部に漏れたら、まずいことですね……。

谷田部

……ま、そんなわけで、今こうなってることについては痛み分けて事で、目をつぶってもらえますね。

柏木

……。

小栗

……谷田部、じゃあお前はどうしたいんだ。

安岡

課長、

谷田部

だから、まともに刑が執行されるようにして欲しいんですよ。

小栗

だから、具体的にどうしたらいいのか、言ってくれ。

谷田部

……ありがとうございます。じゃあ、まず、甲村さん、僕と役をチェンジしましょう。

甲村

チェンジ？

谷田部

僕が三塚を抱える役をやりませう。

甲村

バカか。お前は補佐だろ。

谷田部

僕の方が余計なことせず的確に仕事をこなせますから。甲村さんが補佐に回って下さい。

甲村

お前、いい加減にしろよ。

谷田部

もちろん、実際の執行の時も僕がやります。

柏木

谷田部……。

小栗

……分かった。

安岡

え？

小栗

ただし、予行演習でまともに出来なかつたら、補佐に戻ってもらう。

谷田部

それでいいですよ。

小栗

よし……では、

谷田部

それと課長、

小栗

？

谷田部

三塚の役は課長にやつてもらいたいんですが。

小栗

……。

杉宇良

え、俺は？

谷田部

全員に緊張感を持たせるためです。杉宇良にやらせてるんじやお遊びになってしまいうんで。

杉宇良

お遊びって、

谷田部

率先してふざけるし。

杉宇良

率先して？ ねーよ！ それはねーよ！

杉宇良

(周囲に) なあ、お前ら！

## しんじゃうおへや

全員、無言。

杉宇良 (哀しそうに) お前ら……。  
谷田部 課長が死刑囚役なら、自ずと緊張感が増すでしょう。この場の責任者である課長には、一番そ

の緊張感を味わって頂きたいですし。

なるほど……。みんな、今、谷田部が言ったこと聞いたか？

はい。

聞きましたけど、

その通りやってみよう。

いや、それは……。

課長、その必要はないでしょう。

やらせてやれ！

……課長、ありがとうございます。

(念を押すように) やらせてやってくれ。

間。

甲村 ……分かりました。補佐に回ります。

小栗 すまん。

……。

谷田部 じゃあ他の皆さんも、それでよろしいですか？

沈黙。

谷田部 反論が無いので、承認されたものとします。課長、ご苦労様でした。

谷田部、小栗から手を放す。

安岡 (小栗に駆け寄り) 大丈夫ですか？

小栗 大丈夫だ。

谷田部 それじゃ、みなさん。最初の位置について下さい。

皆、動かない。

谷田部 早くして下さい。

皆、足取りが重いながらも動き出し、各々の位置につこうとする。

だがその中で、柏木が猛然と谷田部に向かっていく。

小栗 やめろ。

柏木、立ち止まる。

柏木 僕は、やましいところはありませんから。

柏木、谷田部の前に立ち、胸ぐらを掴む。

柏木 こんなことで、お前は満足か。これで自分が正しいことが証明されたと思ってるのか。

谷田部 ……柏木さん、早くして下さい。時間がもったいない。

柏木 谷田部……お前、

永瀬 柏木君！

永瀬が柏木に近づき、

永瀬 やりましょう。

柏木 ……谷田部、

永瀬 早くやろう。

柏木 谷田部、みんな知ってるんだ。

## しんじゃうおへや

谷田部

……はい？

柏木

みんななあ、知ってるんだよ。

谷田部

……何をですか。

柏木

お前、昔……ストーカーに妹を殺されたんだってな。

谷田部

……。

永瀬

柏木君……。

柏木

みんな知ってるんだよ。みんな聞いている。

谷田部

……ですか……。

柏木

……だから、お前が刑務官になったのも分かる。拘置所の死刑囚房担当に自分で志願したというのも分かる。お前がその手で犯罪者を殺してやりたいという気持ちも分かる。でもな、独善的すぎないか？

谷田部

……僕の気持ち、分からないでしょう。分からないのに分かんるとか言わないで下さい。分かっても、

柏木

……僕も、

谷田部

妹を殺した犯人は……その男は、自殺したんです。

柏木

え？

谷田部

勝手に殺して、そして勝手に死にやがったんです。そうしたら、身体の中が、怒りと憎しみで

柏木

いっぱいになったんです。それしかなくなっちゃったんです。……それ、分かりますか？

谷田部

……。

柏木

じゃあ、谷田部……お前は人殺しの気持ちが分かるのか？

甲村

……は？

谷田部

人殺しの気持ちが分かるかって聞いたんだ。

安岡

甲村さん、

甲村

……何言い出してるんですか。分かるわけ無いでしょう。

谷田部

そうか。俺は分かるんだよ。何人も殺してきてるからな。この部屋で。俺だけじゃない。杉宇良

甲村

も、安岡も、小栗課長も、今まで何人もの死刑囚の執行に立ち会ってきた。……実際に執行してきた。

谷田部

甲村さん……それが、我々の仕事でしょう。

甲村

確かに仕事だ、でも、

谷田部

仕事だとしても、自分の意志じゃなくても、人を殺したことは変わりないんだ。長年、この

小栗

拘置所の中で面倒見てきた人間をな、殺すんだよ。殺すんだ。それは……最悪だぞ。

谷田部

……。

甲村

……それが分かってるから、それを忘れたいから、ふざけちゃうんだよ。どうでもいいことだ

谷田部

と思ひ込むために、罪悪感を誤魔化すために……。そうでもしないと、もう本当に耐えられな

甲村

いんだ……。俺はな……。谷田部……、

安岡

甲村さん、

甲村

俺はな！ 誰も殺したくねえんだ！

安岡

……。

小栗、杉宇良の方へ行き、

手錠かけろ。

あ、はい。(自分に手錠をかけようとする)

違う。俺にかけろ。

はい？

かけろ。

え、本当にやるんですか？

約束だからな。やるんだよな？

## しんじゃうおへや

谷田部 ……はい。  
杉宇良 え、じゃ、服、取り替えますか？  
小栗 いや、いい。このままでいい。あ、帽子だけ持ってきてくれ。  
安岡 はい……。

小栗は安岡に帽子を渡し、杉宇良に手錠をかけてもらう。

小栗 甲村、  
甲村 すいません。  
小栗 ……うん。じゃあ、はじめようか。これでラストにしよう。甲村と谷田部は役を交代。杉宇良は俺と交代だ。では、位置につけ。  
一同 ……はい。

小栗、谷田部、能野、永瀬、柏木はカーテンを閉め、その奥に待機する。

杉宇良 あ……では、カーテンを開けて、進め。

冒頭と同じように、カーテンを開け、刑務官たちが登場する。

小栗達は何も言わず、静かに進んでいく。

杉宇良 (小声で) あの、課長、叫んだりとかは……？  
小栗 今まで俺が執行してきた者達は、ほとんど抵抗しなかった。泣いたり、失禁したり、震えが止まらない奴はいても、執行には素直に応じていた。  
杉宇良 いや、でも、  
小栗 三塚は、あいつは暴れたりしない。  
杉宇良 ……はい。  
谷田部 ……。

小栗、区切られた床に立つ。

小栗 早く、足を縛れ。

能野、小栗の足を縛る。

間。

小栗 谷田部。  
谷田部 ……。  
小栗 絞縄をかけろ。

谷田部、小栗の首に絞縄を引っかける。

小栗 しっかり固定しろ。

谷田部、絞縄を固定する。

小栗 出来たか？  
谷田部 ……はい。

間。

小栗 位置につけ。

一同、驚いて小栗を見る。

柏木 え？  
小栗 位置につけ。  
安岡 あの、ここまでじゃ……。

## しんじゃうおへや

小栗 ボタンの前に立て。早く。

谷田部、右端のボタンの前へ向かう。続いて、柏木、永瀬もそれぞれボタンの前に立つ。安岡と甲村は小栗の体を支える。

甲村 位置につきました。

小栗 ……では杉宇良、合図を出せ。

杉宇良 え？

小栗 合図を出せ。

杉宇良 いやいやいや、今やったら床開きますよ！ 落ちますよ！ 落ちますよって言うか、

小栗 大丈夫だ。

甲村 どういうつもりですか？

小栗 大丈夫だ。今は回路を切つてある。

安岡 あ、そうなんですか？

杉宇良 ああ……それなら。

小栗 だから、早くしろ。

杉宇良 あ、はい。じゃあ……

杉宇良、片手を真上に挙げる。柏木、永瀬、谷田部、ボタンを押す構え。

が、

谷田部 ちよつと待って下さい！

杉宇良 え？

谷田部 ……本当に回路切つたんですか？

小栗 本当だ。明日の朝には戻しておく。

間。

谷田部 ……分かりました。すいません。

小栗 ……。

杉宇良 ……あ、じゃあ、もう一回行きます。

杉宇良、腕を上挙げる。柏木、永瀬、谷田部、ボタンを押す構え。

一呼吸おいて、杉宇良腕を振り下ろす。ボタンが押される。

少し長い沈黙。

小栗 ……押したか。

柏木・永瀬・谷田部 はい。

小栗 よし。終わろう。

一同 はい……。

甲村と安岡で、小栗から白布を外し、手足を解放する。

小栗 問題なかったか？

安岡 はい。

甲村 はい。

小栗 では、深夜までご苦労さまでした。執行本番もよろしくお願いします。お疲れ様でした。

小栗、敬礼をする。他の刑務官達も敬礼する。

みな、そろそろと部屋を出て行く。小栗、谷田部、杉宇良、甲村が残る。

甲村 谷田部。

谷田部 ……何ですか。

甲村 ……。

小栗 (二人が向かい合ってるのに気づき) 甲村、

甲村 ……明日、しっかりやれよ。

谷田部 ……もちろんです。

## しんじゃうおへや

甲村、去る。小栗も続いて去る。

谷田部 ……。

杉宇良 なあ。

谷田部 ……。

杉宇良 ちよ、なあ。

谷田部 ……何ですか？

杉宇良 指、震えたら？

谷田部 ……は？

杉宇良 ボタンを押す指。ビビって。ブルブルブルって。

谷田部 (溜息をつき) 震えてねえよ。

杉宇良 嘘だね！ どんだけでかい口叩いても……ていうかタメ口やめろ！

谷田部 人のことはいいから、補助レバー係頑張れよ。

杉宇良 上から目線で言うな！

小栗、戻ってくる。

小栗 早く出る。閉めるぞ。

杉宇良 あ、課長、こいつ本当に、

谷田部 課長、

小栗 ん？

谷田部 ……腕、大丈夫ですか。

小栗 痛えよ、バカ。

谷田部 ……すいません。

小栗と谷田部、去る。取り残される杉宇良。

杉宇良 ……あの野郎……。押す時絶対にビビってたくせに。(指先を震わせて) こんな感じで。

杉宇良、出口に向かいながら、左側から順にボタンを押していく。

そして右端のボタンを押した途端、踏み板が開き、その衝撃音が大きく響く。

杉宇良 ん……？

杉宇良、慌てて床を見に行く。

杉宇良 ……あれ？ だって、回路切ってるって……明日の朝まで……。

部屋の外から声が聞こえてくる。

小栗(声) 閉めるぞー。

ドアなのか、踏み板なのか、金属の扉が閉まる音が部屋に響き渡る。

暗転。

# しんじゃうおへや

舞台上の壁に字幕が映る。

字幕「同日、午前一〇時三十六分」

字幕「死刑囚 三塚 孝の」

字幕「死刑を執行し、」

字幕「これを完了した。」

字幕「執行に当たっては、」

字幕「全く取り乱すことなく、素直に指示に従い、」

字幕「つつがなく進行した」

字幕「が、」

字幕「執行の際、踏み板の開閉ボタンが押される段になり、」

字幕「担当官三名によって同時にボタンが押されたが」

字幕「作動せず、」

字幕「再度、ボタンを押させたが、やはり」

字幕「作動せず。」

字幕「やむを得ず、予備レバーによって踏み板を開き、」

天井（上階の床）の一部が勢い良く開く。

字幕「事なきを得た。」

字幕「落下後、」

字幕「十八分四十三秒を経過したところで」

字幕「脈拍停止。」

字幕「死刑囚 三塚 孝の」

字幕「死亡を確認した。」

字幕「以上。」

舞台は薄明かりに照らされる。

刑務官達が出てきて、ロープやレバーなどを撤去していく。

撤去後、刑務官はドアを開け、去っていく。

## 第二話 開いて閉じて

時間は午後一時半頃。

部屋は、死刑執行室の踏み板が開いたその先の、地下室。

天井の「踏み板」が開いている。その真下には排水溝が同じ大きさで設置されている。しかし、その他は特に何もない、ガランとした部屋。

と、ドアの鍵が開く音がする。ドアが開き、電気工事の福山、岩上、高橋が入ってくる。手には工具箱を持っている。

高橋 失礼しまーす。

岩上 (福山を押しながら) 早く行って、早く行って、早く行って！

福山 押すな！

岩上 だって、怖いんだもん！

福山 だったら、余計押すな！

岩上 だってだってだって、うるさい！

福山 岩上、ふてくされたように黙る。

高橋 (ふと) え、なんか聞こえませんでした？

岩上 シッ！

高橋 なんか聞こえた！

岩上 嘘！

## しんじゃうおへや

福山 うるさい、ほんとに！  
高橋 ほんとに聞こえたんですって！  
福山 じゃあ、無視して下さい。  
高橋 ……はい。  
福山 (天井を見て) あ、アレか。  
岩上 ……あれ？

岩上 岩上、床に落ちていた服のボタンを拾い上げる。  
福山 こんなところにボタンが。  
岩上 何でも思ったこと口に出すの止めなさい。  
岩上 ……。

と、いきなり、天井が勢いよく閉まる。

岩上・福山 うわあ！（とか、驚く）  
福山 おお、びっくりしたあ……。

岩上は、急いでドアを開けて出て行こうとする。が、開かない。

福山 どうしたの？  
岩上 開かないよ！ 開かないです！  
福山 ……岩上さん。  
岩上 フクさん、開かないです！（と、思い切りドアを引つ張る）  
福山 ……岩上さん、それ、  
高橋 それ、押すんですよ。  
岩上 ……？

岩上、恐る恐る、ドアを押す。開く。

岩上 開いた……。  
福山 入ってくる時は引いたんだから、出る時は押すでしょ。  
岩上 ……ごめんなさい、ドジっこ体質で。  
高橋 そんな年じゃないよね。  
岩上 ……帰ります。  
福山 いや、ちよっと！ 天井！ あれ見に来たんですよ！  
岩上 さっき勝手に閉まりましたよ、あれ！  
福山 俺もびっくりしましたけど、

三人、こわこわと天井を見上げていると、能野が入ってくる。

能野 すいません。  
岩上・福山 (驚き) おーい！  
高橋 あ、すいません。  
能野 いえ、すいません。驚かしてしまつて。電気工事の（方ですよね）？  
福山 ええ、はい。  
岩上 あの今、あの今、上あれ閉まつたんですけど！ 勝手に！ あれあれあれ！  
能野 私が今閉めたんです。  
岩上 ……嘘。  
能野 嘘じゃなくて。

高橋 あれ？ 動くようになったんですか？  
能野 開閉は一応、手動で出来るんです。けど、ボタンを押しても開いたり開かなかつたりで。  
福山 ああ。なるほど。

岩上 ボタン？ え、ボタンを押すと、あれが開くんですか？  
能野 はい。  
岩上 誰の？  
能野 ……いや、誰のってわけじゃないんですけど。  
岩上 誰のってわけじゃなく、ボタンを押すとあれが開くんですか？  
能野 はい？

# しんじゃうおへや

福山

(嫌な予感) ……あの、岩上さん、

岩上、能野の制服についてのボタンを真剣に押す。天井を確認し、また何回か押す。

岩上

……嘘。

能野

(戸惑い) え、何!?

岩上

開かないじゃん。

福山

岩上さん! (能野に) すいません!

能野

何なんですか!

福山

(岩上に) ボタンでそれじゃないから! 服のじゃない! 機械とかリモコンとかそういうの

岩上

……ああ。そっちな。

高橋

(ニヤニヤと) 服のボタン押すかね、普通。

岩上

だって、ここ普通の部屋じゃないし!

福山

そう言う問題じゃないの!

高橋

まあ、面白かったからいいけど。

福山

高橋さん、

岩上

だいたい、丁度良くそこに落ちてんだもん、ボタンが!

能野

知らないよ!

岩上

ボタン? さっきそこに落ちてたんですよ。シャツのボタンみたいな……あれ? どこやった?

能野

落ちてました?

岩上

あれ? あ、アレだ! さっき天井がバーンってなってワーってなってどっかバーンって。

岩上、床を見回すが、見あたらない。

高橋、床と設置されている排水溝(1話と同じく九〇センチメートル四方に区切られた部分)を見て、

た部分)を見て、

高橋

……この中に落ちた?

岩上

ああ、そこに落とされたのかも。(排水溝をベタベタ触る)

福山

あ、そこ……。 (浮かない表情)

岩上

これ排水溝ですよ。なんでこんなところに排水溝あるんですか?

高橋

そういや、変だね。不思議。

能野

えーと……まあ……。

ドアが開き、谷田部が入ってくる。顔色が悪い様子。

谷田部

能野さん。

能野

あれ? 帰ったんじゃないの?

谷田部

いえ。帰っていいんだよ? 電気工事の人来たし、私もこれから帰るから。

能野

……はい。

谷田部

……大丈夫?

能野

大丈夫です。あ、それで、帰る前に所長室寄って欲しいそうです。

谷田部

あ、そう。分かりました。

能野

それじゃ、失礼します。

福山

あ、私も行く。(福山に) じゃ、あとはよろしくお願いします。

岩上

はい。

能野

あ。

谷田部と能野、出て行く。

福山

なんか顔色悪かったな、今の人。

岩上

え、どっち?

福山

いや、男の方。

岩上

見てなかった。

福山

えー。

高橋

確かに。顔色悪かった。

福山

ですよ?

## しんじゃうおへや

岩上 それより、この排水溝って、何のためについてると思う？  
福山 ……知らない。

福山は工具箱を置き、部屋の中を歩いて配電盤などが無いか探す。

岩上 ねえ、ちよつと。ねえ。

福山 何ですか。

岩上 排水溝さあ、

福山 うち別に排水溝調べに来たんじゃないから！

岩上 だって気になるんだもん。

福山 いいから、仕事してくださいよ！ 電気屋の！

高橋 フクさん、知ってるんじゃないの？

福山 ……え？

高橋 排水溝がある理由。前にも一回点検しに来たことあるんでしょ？

福山 ……まあ。でも、

高橋 なんかさつき変な顔してたし。

福山 変な顔って、

高橋 知ってるでしょ？ これのこと。（排水溝を指す）

福山 ……まあ。

岩上 え、フクさん知ってるの

福山 いや、いいから仕事しましょうよ！

岩上 聞いたらね。で、何これ？

福山 いや、だからあ！

部屋の外から「カチャツ」という音が聞こえる。

福山 ……ん？

岩上 何？

福山 何か今、音しなかった？

岩上 だから、さつきしたって言ったじゃん。

高橋 今みたいな音？

福山 今のは聞いてなかったけど。

高橋 いやいや、それより排水溝の話は！

岩上 んー……だってやっぱ聞かない方がいいと思いますよ。

福山 ちよい！ 何、福山さん。ジラし作戦？ ジラシ星人？

岩上 星人じゃないけど。

福山 ジラすなよ！ ジラされて女が喜ぶと思ったら大間違いだ！

高橋 ジラしてないって。

高橋 女に対してそう言う扱いをするからか。彼女と別れたと思ったら。

福山 それは関係ないって！

岩上 じゃあ、とつとと言えよ！

福山 いや、いいから仕事を、

岩上（インディアンのように）お前すぐ話す、俺話聞く、仕事はかどる。

岩上、高橋、はやし立てるように排水溝コールを起こす。

福山 もう、分かったよ！ 言います言います！

高橋 新しい彼女出来るといいね♪

福山 うげえ……。聞いたら、すぐに仕事して下さいね。

岩上 するする。合コンもセットしてあげる。

福山 いいです、年下がいいんで。

岩上・高橋 （舌打ち）

福山 ……あのー……これ（排水溝）あるじゃないすか。

岩上 ふん。

福山 で、真上に、同じくらいの大ささの四角があるじゃないすか。

岩上 ふん。さつき閉まったとこね。で？

福山 ……だから、あれが、死刑の時に開くじゃないすか。

岩上 ……ふん。

福山 で、こう、落ちて来るじゃないすか。

## しんじゃうおへや

岩上 何が。  
福山 人が。

岩上 ……ふん。えええ!! そのまま排水溝にスポーンって行くってこと!?

福山 違う!

高橋 そのまま流すとS字パイプのところ詰まっちゃうから。

福山 そういうことでもない! ぶら下がるでしょ! 首に縄かけてるんだから。で、ここらへんに  
ブラーンとぶら下がるわけでしょ!

岩上 ……ああ。

高橋 (神妙に頷き) ……。

福山 で、その時って、あの…おしつことか、うんちとか、漏らしちゃうんだって。口からもウエ  
ツてなんかこう、吐いたり。

岩上 ……うああ。

福山 それをね、そのまま流しちゃうために、真下にあるんだって。排水溝が。

沈黙。

福山 ついでに言うと、(客席側を見て) こっちの広い階段あるでしょ? この上の方から、その光景  
を偉い人がじっと見てるんだってさ。

沈黙。

福山 じゃ、仕事しよう。

高橋 はい。

岩上 無理いいい!

福山 だから、言ったでしょう!

岩上 怖い気持ち悪い! 怖い気持ち悪いいいい! 聞かなきゃ良かったああ!

福山 こっちだつて言いたくなかつたよ!

岩上 言わなきゃいいのに! (福山を押す)

福山 ……。(カチンと来た)

福山、岩上を排水溝の方へ向かつて突き飛ばす。岩上、排水溝の上に立つ。

岩上 (その場で) 踏んでる踏んでる踏んでる踏んでる!

福山 じゃ、どけりゃいいじゃん。

岩上 どかしてよ、どかしてよ!

福山、岩上を横から軽く押してあげる。岩上、壁まで転がる。

福山 そんな押してないよ!

岩上 (泣きながら) 鬼だああ! 鬼がいますよ、ここに!

福山 自分で転がってんじゃない!

岩上 もうやだあ…。(高橋に抱きつく)

福山 こっちがだよ…。

高橋、岩上をなぐさめる。

福山、部屋の中を見回す。階段の上の方(客席)へも行く。

福山 やっぱり、何も無いな。ここ見てもダメだ。高橋さん、ちよつと1回出るよ。

高橋 ……は?

福山 この部屋何も無いから、配電のどこ、まず見せてもらいましょう。

高橋 はい。

岩上 え、私は?

福山 ここに残って天井見てて。

岩上 やだ!

岩上、ダッシュでドア前へ行き、ドアを開けようとするが、開かない。

岩上 ……開かない。

福山 学習能力ゼロですか。入る時に引いたから、出る時は押すんですよ。

## しんじゃうおへや

岩上 ……押してるよ。  
福山 (半信半疑で) ……えー？

福山、ドアを開けようとするが開かない。

福山 あれ？ おっかしいな……。  
岩上 ……開かないよ……やばいよ！ 呪いだよ！ 死刑囚の呪いだよ！ だって、今日死刑になっ  
たばかりなんでしょ!? その人だよ！  
福山 岩上さん、落ち着いて！

福山、ドアを何度も開けようとするが開かない。

福山 (部屋の外に向かつて) すいませーん！ すいませーん！  
岩上 閉じこめられたよ！ さっきフクさんがあんな話するから！  
福山 そんなわけ無いって！ ねえ、高橋さん、  
高橋 ……あんな話するから。  
福山 いや、ちよつと！  
岩上 あんな話するから……。  
高橋 あんな話するから……。  
福山 そんなわけ無いでしょう！  
岩上・高橋 ……。  
福山 そんなわけ無いでしょう!!  
岩上・高橋 ……。  
福山 福山、岩上の互いの手を取り、和解する。  
岩上 ……で、どうしよう……。  
福山 俺もごめんね、ごめんね、突き飛ばしたりしてごめんね！

短い沈黙。

高橋 携帯は？  
福山 携帯！  
岩上 携帯！

三人、一斉に携帯電話を取り出す。

福山 電波無い。  
岩上 電波無い。  
高橋 電波無い。  
福山 ソフトバンク。  
岩上 ソフトバンク。  
高橋 ソフトバンク。  
三人 ソフトバンク！ (と、携帯電話を思い切り叩く)

三人、悩む。岩上がおもむろに、部屋のあちこちの壁を叩いたり、床を叩いたり。  
高橋もそれに続く。福山、不思議そうにそれを見ている。

岩上 隠し扉無し！  
高橋 こっちも無し！  
福山 無いよ！

三人、悩む。福山と岩上、排水溝に視線が向く。そして、目が合う。

岩上 念のためだけど……(排水溝を指し) ここは無いよね……？  
福山 ここだけは無いよ……。

## しんじゃうおへや

岩上 ね。  
高橋 ……とりあえず、誰かが来るのを待ちますか。

三人、部屋の隅へ移動する。  
しばし、沈黙。

岩上 ……フクさん。ハシさん。  
高橋 ……何？

福山 ……何ですか  
岩上 幽霊って信じる人？

高橋 ……んー。  
福山 ……僕は割と信じてます。

岩上 電気屋なのに？  
福山 関係ないですよ。信じてるから怖いんですよ、今！

岩上 あ、そう……私、信じてない。  
福山 え、信じてないの？

岩上 うん。でも、怖い。もしもいたらと思うと、怖い。  
福山 そういうもん？

岩上 そういうもん。……あと、何怖い？  
福山 なんて、怖い話しようとするの！

岩上 ……だって、こんな時に面白い話しても白々しいじゃない。  
福山 ん、まあ……。

岩上 で、何が怖い？  
高橋 ……宇宙のかさが怖いです。  
岩上 え、なんで？

高橋 宇宙のスケールで考えると、自分がちっぽけすぎるじゃないですか。存在が。  
福山 はあ。

高橋 何万光年先の星雲が消滅したとか、ブラックホールが観測されたとか、宇宙はまだ膨張を続けてるとか、そんな話聞いて考え始めるとなんか胸がグーッと潰されそうに怖くなるんです。分かります？

岩上 ……分かる。  
福山 分からねえ……岩上さんは？

岩上 自分の美しさ。  
福山 ベタな上に、面白い話にしようとしてるじゃないですか。

岩上 ね、白々しいでしょ？  
福山 確かに。

岩上 後は何怖い？  
高橋 東……京……。

福山 もう止めましょうよ！ そういう話って——  
福山、突然固まり、に黙りこくる。

岩上 ……ねえ……後は何が怖いの？ だから、ジラさないでって。  
福山、静かに笑い出す。

岩上 ……え、何？  
福山、不敵に笑い出す。

岩上 え、何？ 取り憑かれたの？ 死刑囚に取り憑かれたの？  
福山、大仰に笑い出す。笑い転げる。

岩上 え……？  
福山、立ち上がり、工具箱を手を取って、岩上と高橋の方へ振り返る。

岩上 高橋、それに反応し、不敵に笑い出す。二人で不敵に笑いながら、近寄る。

岩上 ……？

岩上 ……？

岩上 ……？

岩上 ……？

## しんじゃうおへや

岩上 え、ハシさんまで、どうしたの……？

福山、おもむろに工具箱を開け、電動ドリルを取り出し、ドアの方に向けて軽くトリガーをひいて回す。

それを見て二人で大仰に笑い出す。高橋、笑い転げる。それを観ていた岩上も、ようやくことを理解して笑い出す。

電動ドリルをフル回転させながら、ドアの前に向かって行進していく三人組。近づいていく内にどんどん笑いは狂ったようにひどくなり、三人の笑い、最高潮。

と、その時ドアが開いて、慌てた様子の能野が入ってくる。

能野 ごめんなさい！

三人組！（笑い止む）

能野 ついさつき間違っちゃって！危うく帰るところでした！

三人組……。

能野（ドリルを見て）あ、それ何か、穴開けるんですか？

ドリルの回転、止まる。

福山 ……いえ、別に。

能野 あ、そうですか。

福山 この部屋には何も無いみたいなので、配電盤見たいんですけど。

能野 あ、はい、じゃあ上の方にどうぞ。

福山 お願いします。

岩上、そそくさと工具箱を手に持つ。

高橋 ……あ、あのー！

能野 はい？

高橋 配電盤見る前に、一度動作確認したいんで、ボタン押させてもらっていいですか？

能野 ボタンですか？

高橋 はい。（岩上を見る）

岩上（ピンときて）あ、ああ、そうね。

福山 あー。いいですか？

能野 ええ、まあ、いいですよ。

高橋 じゃあ、岩上さん。

岩上 はい。では、失礼して。……ハイ！

岩上、能野のシャツのボタンを思い切り強く突く。

暗転。

第三話 彷徨さまよひ

時間は午前10時半頃。  
場所は第二話と同じ部屋のようだが、粗末な椅子が一つ転がっている。

静寂の中、三塚 孝(みつづか たかし)が、第1ボタンの取れたYシャツを着て、一人つつ立っている。  
三塚は、ふと我に返ったように不思議そうに部屋を眺め始め、周囲を歩き回る。やがて穴の開いた天井を見上げ、

三塚 眩しい。……他は……何もないな。

三塚は第1ボタンが取れた部分をしきりに気にしつつ、考え込み、ひとまずドアから出て行こうとする。ドアノブに手をかけ、ドアを開くと、同時に向こう側から女が入ってくる。女は二十代後半ほどだろうか。仕事帰りのOLのような服装をしている。三塚と女、目が合う。

三塚 あ。  
女 ……えっと、  
三塚 え？  
女 いや。  
三塚 ビックリした。  
女 すいません。  
三塚 あの、え？ えーと……。  
女 すいません。  
三塚 誰ですか？  
女 え？ 僕ですか？  
三塚 いや、はい。  
女 誰って……んーと……ていうか、お会いしたことありますよね？  
三塚 ……。いいえ。  
女 そうですか？  
三塚 分かりません。  
女 分かりませんって、その、勝手に私が僕はお会いしたことあると思いますが。  
三塚 ……誰です？  
女 誰って、何て説明したらいいですかね。  
三塚 すいません。あなたのこと分かりません。知りません。  
三塚 そんなはず無いでしょう。だって、  
女 何ですか？  
三塚 だって……だって……あれ？ 忘れちゃったな……。でも、絶対会ったことあります！  
三塚 何言ってるんですか、さつきから。  
女 何って、  
三塚 (やや怯えたように) やめて下さい。  
女 何も……。

間。

女 行かないんですか？  
三塚 行くつもりだったんですけど、ちょっとその前に聞きたいんです。  
女 誰なんですか、あなた！  
三塚 ここはどこなんですか！  
女 ……は？  
三塚 すいません、大声出してしまつて。ただ、気がいたらこんなところに居たって言うか、ちょっと自分でも理解できてないんですけど、  
女 ここは私の部屋です！  
三塚 は？ あなたの……？  
女 そうですよ！

## しんじゃうおへや

三塚 え……私の部屋ですって……いや、こんなところに？ それはないでしょう。  
女 私の部屋ですから！  
三塚 でも、何も無いですよ？ ただ何も無い部屋で、天井に穴が開いてて。  
女 さつきから変なこと言わないで！  
三塚 いや、変なこと言ってるのはそっちでしょう。（女に近寄ろうとする）  
女 近づかないで！

女、部屋の奥に向かって走り出す。そして壁の向こう側へ忽然と消える。

三塚 あれ？ ……あの人、誰だっけ？ 絶対会ったことあるはずだけど……。

と、ドアが開き、刑務官・小栗が入ってくる。  
そこは三塚の居室に変わっていく。

小栗 どうした？  
三塚 ん？ あ、小栗さん。  
小栗 何か喋ってなかったか？  
三塚 あ、いや、独り言です。  
小栗 何喋ってたんだ。  
三塚 （椅子に座りながら）だから、独り言ですよ。  
小栗 その独り言の内容だよ。  
三塚 内容ですか……忘れしました。本当に。本当です。  
小栗 なんだ、もうボケてきたのか。  
三塚 多分、どうでもいいこと喋ってたんですよ。  
小栗 落語でも喋ってたか。  
三塚 そんなもの喋れませんよ。  
小栗 じゃあ何喋ってたんだ？  
三塚 ですから……忘れしました。  
小栗 （ふと気づき）雨だな。

三塚が振り返ると、うつすらと雨の音が聞こえてくる。

小栗 いつからだ？  
三塚 1時間くらい前からだと思いますが。朝は晴れてましたけどね。  
小栗 時計もないのによく時間わかるな。  
三塚 いえ、なんとなくです。大体です。  
小栗 そうか。  
三塚 ……雨は嫌だな。

雨足が強くなる。

小栗 ラジオでも聞くか？  
三塚 ラジオですか。  
小栗 たまにはどうだ。  
三塚 ……いいです。  
小栗 そうか。  
三塚 すいません。  
小栗 いや。  
三塚 ……。  
小栗 そういえば、ちよっとお前に聞きたいと思ってたんだが。  
三塚 何でしょう？  
小栗 あいつのこと、どう思う？  
三塚 あいつって？  
小栗 谷田部。  
三塚 ああ……。  
小栗 お前の目から見て、あいつはどう見える？ 最近。  
三塚 それは、私が言うべきことじゃないですよ。  
小栗 いや、お前の意見を聞きたいんだ。あいつは以前、お前と揉めたこともあったし、また何か  
三塚 小栗さん。

## しんじゃうおへや

小栗 何もありませんから。以前から、何もありません。  
三塚 ……どう思うかだけ教えてくれればいいんだ。率直な意見を。いや、感想か。印象。  
小栗 ……立派にやっつてると思えますよ。刑務官としての誇りというんですか？ そういうものをし  
三塚 っかり持つてると思えます。若いのに立派だと思えます。  
小栗 誇りというか……気持ちが強すぎるような気もするんだが、俺は。  
三塚 刑務官として必要なことなんじゃないですか？ 気持ちを強く持つのは。  
小栗 それもそうだが……同僚や俺につつかかってくる時もあったな。  
三塚 そこらへんはもう少し経験を積みれば、バランスとれるようになるんじゃないですか？  
小栗 ……だいたいいいんだが。  
三塚 (鼻で笑い) ……。  
小栗 ん？  
三塚 私なんかバダンスだとか言うのはおかしいですけどね。  
小栗 ……いや、ご意見ありがとうございます。  
三塚 意見じゃないですよ。あまり参考にしないで下さい。  
小栗 ……。

小栗、突然物思いに耽り出したように、ただぼんやりとそこに立って動かなくなる。

三塚 ……小栗さん？  
小栗 ん？  
三塚 まだ何かありましたか？  
小栗 ん、あ、えーとな、ほら、この前頼まれた本なんだけだな。続編探してくれって言われた奴。  
三塚 ああ、ありがとうございます。  
小栗 いや、見つかなかったんだ。  
三塚 そうですか……。  
小栗 いや見つかなかったつちゅうか、まだ入荷してないってよ。店の人に聞いたんだけど。  
三塚 ああ……いえ、こちらこそすいません。わざわざ。  
小栗 ごめんな。  
三塚 すいません。いつ入って言ってました？  
小栗 ん？ んーと……なんか売切れていつ入ってくるか分からないらしい。  
三塚 来週には入りますか？  
小栗 さあ。  
三塚 来月になりますか？  
小栗 分からないな。俺に聞かれても。  
三塚 ……んー。凶々しくて申し訳ないんですが。  
小栗 なんだ？  
三塚 良かったら予約というか、取り寄せしてもらえませんか？  
小栗 取り寄せか。  
三塚 どうしても続きが読みたいんです。  
小栗 そんなに面白いのか？  
三塚 続きが気になるんです。  
小栗 ……分かった。  
三塚 すぐじゃなくてもいいんです。ついでの時で。本屋に立ち寄ったときでいいんです。  
小栗 いや、今日また行ってきた頼んでくる。  
三塚 ありがとうございます！  
小栗 そんなに面白いんだったら、読み終わったら俺に貸してくれ。  
三塚 はい(笑)  
小栗 何が面白いんだ、そんなに。  
三塚 うーん、そうですね。何がって、  
小栗 説明できないか？  
三塚 簡単に言うんですね、主人公が自分に似てる感じがするんですよ。  
小栗 ほう。どの辺が。  
三塚 どの辺。んー……。

雨足がまた強くなる。三塚、シャツの第一ボタンの部分を触り、

三塚 あ、ボタン、取れかかっている。  
小栗 え？

## しんじゃうおへや

三塚  
小栗  
三塚

このボタン……そういえば、だいぶ前に小栗さんにつけてもらいましたよね。  
ああ……。  
何年前だろう？

先ほど消えた女が、どこからともなく現れる。  
三塚はそれに気づき、

三塚  
女  
三塚  
小栗

あ。  
あ。  
ねえ、ちよつと、  
ん？

三塚、女の方へ寄っていきこうとするが、女は走って逃げ、またどこかへ消えた。  
と、同時に雨が止む。

三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚  
佐久間

あれ？ どこ行った？  
それじゃ、行くわ。  
え？  
静かにしててくれよ。  
はい……。あ、小栗さん。  
ん？  
ちよつと聞きたいことが。  
何だ？  
……。あの、  
ちよつと聞きたいことが。

と、部屋の隅に、いつの間にかスーツ姿の男・佐久間が現れていた。

三塚  
佐久間  
三塚  
佐久間  
三塚  
佐久間  
三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚

……はい？  
ちよつと聞きたいことが。  
何でしょう？ すぐ出かけなきゃいけないんで。  
ちよつと聞きたいことが。  
わかりました。少しなら。  
おい。  
はい。  
行くぞ。  
すいません。

小栗、ドアを開けて去る。

佐久間  
三塚  
佐久間  
三塚

ちよつと聞きたいことが。  
分かったよ、しつこいな。  
4回しか聞いてませんよ？  
4回も、だろ。  
いやあ、ずいぶん短気ですね。  
余計なお世話だ。  
すいません。つい思ったこと喋っちゃうんですよ。独り言みたいなもんです。  
お前もか。  
はい？  
ん？ いや、何でもありません。  
……。すいませんね、こんな夜遅くに。  
お茶も何もないすけど。  
のど乾いてないんで、お構いなく。さっさと済ませますから。  
そうすか。

佐久間は部屋の中を眺めながらブラブラと歩く。

佐久間  
三塚

だけど、思ったより広いですね、部屋。  
何も置いてないすから。

## しんじゃうおへや

佐久間 ほんとか。何も無いね。大丈夫なの？ これで暮らして行けんの？

三塚 はい。

佐久間 一人？

三塚 三塚

佐久間 へー。なんか却って落ち着かなくない？ 俺ダメだなこういうの。(椅子を蹴り飛ばし) もっと

散らかってないと。机の上なんかでも何にも無いと妙にねえ、

三塚 それで？

佐久間 「それで」？

三塚 それで？

佐久間 それで……さ、手取り早く行きますよー。お仕事は何を？

三塚 ……バイトです。作業員。

佐久間 何の？

三塚 色々。(タバコを取り出す)

佐久間 (タバコを取り上げる) その色々を教えてよ。

三塚 おい。

佐久間 終わったら返すから。

三塚 ……毎日違うんすよ。(転がっている椅子を拾う)

佐久間 (三塚に背中を向けながら) 何で。

だから、色んな現場に連れて行かれるんすよ。土木工事とか、内装工事とか。(椅子を持ったま

ま、佐久間の背後から近づいていく。)

ふーん。(振り返り) どのくらいやってんの。

……今んところは、半年くらい。(椅子を置いて、座る)

三塚 給料は？

佐久間 だから、それもそんな時々で

平均は。大体？

三塚 7千円から8千円。たまに1万円とか。

佐久間 それが目給？

三塚 はい。

佐久間 明細は？ ある？

三塚 ……。

佐久間 明細。出せって。

……そんなもんねーすよ。すぐ捨てるし。

ま、いいや。会社に聞けばいいし。趣味とかないの？

三塚 趣味？

佐久間 そんなもの無いすよ。

三塚 ほんとに？

三塚 ……。

俺はちなみに、休みの日は釣り行ったりとか、キノコとか山菜採りとか。

……へえ。

あとほはたまに家でDVD見たりとか。『24』TWENTY FOUR』って知ってる？

三塚 いや。

アメリカのドラマなんだけどき、先月勢いでDVDBOX買ったんだよ。全36枚。見

たのまだ2枚。もう飽きちゃって。あと、最近はパソコンでユーチューブ見たりな。この前も

猫の動画ばかり見て一日終わったしな。読書とか……好きな作家とかいる？

作家なんか知らねえよ。読まねえよ、本なんか

だろうと思っただ。で？

三塚 ……。

なんかあるだろ趣味の1つや2つ。一人暮らしで、こんな何も無い部屋で、もらった給料どこ

にやるんだよ。貯金でもしてんのか？

三塚 しねえよ。

だろ？ じゃあ何に使うんだよ。家賃と飯代と光熱費以外に。

酒とタバコ。

三塚 それだけじゃねえだろ。

……なんすか。

三塚 借金とか。

ねえよ。趣味じゃねえし。

そう言うけどな、しょっちゅう借金してる奴見てると、案外趣味なんじゃないですかって思え

三塚 てくるんだよ。

## しんじゃうおへや

三塚 そんな悪趣味じゃないですけど。  
佐久間 ……あ、そう。  
三塚 聞きたいことって、それだけですか。  
佐久間 先月、ちょうど24のDVDが届いた次の日だったかな……ここから1キロくらい離れたマンション内で死体が発見されました。  
三塚 (気のない感じで) はあ。  
佐久間 被害者の部屋や財布から現金が無くなってまして、強盗殺人事件とみて捜査しています。  
三塚 あ、そう。  
佐久間 (懐から写真を取りだし) 被害者の方の写真です。

佐久間は三塚にその写真を見せる。三塚、写真をじっと見つめる。

佐久間 ご存じですか？  
三塚 ……見たことありません。  
佐久間 本当に？  
三塚 知りません。

女が、先ほどと同じ場所から再び現れる。

三塚 あ。  
女 あ。  
三塚 また。  
女 ……。  
三塚 どこに居たんですか？  
佐久間 本当に？  
三塚 知りません！(女に) あの、どこでお会いしましたっけ？  
女 知りません。  
佐久間 本当にどこでも見たこと無いんですか？  
三塚 知らないつつつてんだろ！ あの、ちよつと、

三塚は女に近づいていく。

女 近づかないで！

女はドアに向かって駆け出すが、到達する前に三塚は女の腕を掴んで引き止める。

佐久間 監視カメラに写ってたんですよ。  
三塚 (立ち止まり) カメラ？  
佐久間 マンション玄関前の監視カメラ。あなたが写ってたんです。  
三塚 ……はあ。  
佐久間 といっても、玄関内に入ってはいませんでした。向かって左側の、非常階段のある方へと向かって行く姿が写ってました。ま、それだけなんですけど。  
三塚 ……ええ。  
佐久間 いや、逮捕するとかそういうことで来たんじゃないですから、今日は。(写真をしまい、紙を一枚出す) すいませんけど、この紙のここんところに一筆サインもらえますか？  
三塚 はい。

三塚、女から手を離し、佐久間からペンを受け取り、紙にサインをして返す。  
女はその間、なぜかその場から動かずにいる。

佐久間 えーと……読み方は。  
三塚 「みつづか」です。「みつづか たかし」。  
佐久間 ああ。「みつづか たかし」さんですか。  
三塚 はい。  
佐久間 はい。ま、余計なお世話なんですけど、  
三塚 はい？  
佐久間 「塚」の字が間違ってますよ。右の方の線が一本足りないですよ。ここんところの。  
三塚 あ、そうですか。読めないですか？  
佐久間 ……余計なお世話でしたね。

## しんじゃうおへや

三塚  
佐久間

はい。  
じゃ、また何かありましたら。

佐久間、部屋から消えるように去る。  
女は、三塚をぼんやりと眺めながら立ちすくんでいた。

三塚  
女  
三塚  
女  
三塚  
女  
三塚  
女  
三塚  
女  
三塚

……どこなんだ、ここは。(女を見て)どこなんですか、ここは？  
私の部屋です。  
またそれですか。  
私の部屋ですよ。  
だから、こんな何も無い部屋に住んでるわけ無いでしょう。  
……は？  
俺は、そりや、住んでたけど……住んでましたけど、それとこれとは  
お願い。  
え？  
お願い。  
何を？ 何がですか？  
許して。  
は？

女、再びドアを開けて出て行く。

三塚

何なんですか！

三塚、すぐさまドアを開けて出て行こうとするが、開かない。

三塚  
女(声)  
三塚  
女(声)  
三塚

あれ、開かない……ちよつと……ちよつと！ そつちから押さえてますよね！  
え？  
外から押さえてるでしょう、あなた！  
え？  
いや、とぼけんのは無しですよ！ ねえ！

三塚、ドアを叩いたりするが、一向にドアは開かない。

三塚

押してダメなら……引いてみるか！

もちろん、開かない。

三塚

開くわけねえよ！

三塚、へたり込む。と、そのドアを開けて小栗が登場する。

三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚  
小栗  
三塚

……開いた。  
何だ「開いた」って。  
いや、別に。  
(冗談めかして)脱獄か？  
滅相もない(苦笑)。小栗さんこそ、何ですか？  
面会だ。  
え。

面会室へと向かう廊下。弁護士・野本が安岡に先導されて面会室へと向かっている。  
安岡は椅子を一脚持ってきており、面会室の中に設置する。  
三塚も、小栗と谷田部に先導され面会室へ。野本と三塚、ガラスを隔てて向かい合い、  
それぞれ席に着く。小栗と安岡は去り、谷田部は残って三塚の脇に立ち、見張る。

野本  
三塚  
野本

どうも、ご無沙汰です。  
ああ、どうも……。  
すいません、本当は先週来るはずだったんですけど。ちよつと別件で係争中のものがバタバタ  
してまして遅れてしまいました。

## しんじゃうおへや

三塚 いえ、いいんです。お忙しいようで何よりです。  
野本 いやあ……。で、まずあの、差し入れなんですけど。  
三塚 いつもすいません。  
野本 お菓子と飴と雑誌と本と。適当にザツと買ってきたんで。お菓子あまり食べないでしたっけ。  
三塚 まあ食べますけど……。三食食べて動かないでいると少し太って来ちゃって。  
野本 ああ。確かに少しふっくらしましたね。  
三塚 いや、でもありがたく頂きます。  
野本 あ、本は頼まれてた奴、ちゃんと買ってきましたから。続編の。  
三塚 ああ、ありがとうございます。正直、楽しみにしてました。  
野本 そうですか。私、あまり小説とか読まないんですけど、結構人気あるシリーズなんですってね。  
三塚 店頭に平積みで置いてあって。珍しいですよねえ、本が売れないっていう時代に。  
野本 ああ……。平積みって何ですか？  
三塚 ん？ ああ……。あの、本が積み重なってる状態あるじゃないですか。棚じゃなくて。  
野本 あ、ああ。  
三塚 ああいうことです。  
野本 すいません、あまり本屋行ったりしなかったんで。本自体ほとんど読まなかったし。  
三塚 そうなんですか。  
野本 ええ、バカだったんで。今もですけど。  
三塚 あ、えーと時間もアレなんで、本題に入りましょうか。  
野本 そうですね、はい。  
三塚 ざっと、再審請求について、これまで色々やってきましたけども、正直なところですね、新証  
野本 拠や新証言なんかがやはり出てこないわけですよ。  
三塚 ええ。  
野本 この先も実際のところかなり厳しいであろうと思われるわけです。  
三塚 はい。  
野本 なので、この先はですね、  
三塚 ええ、結構です。  
野本 あ、  
三塚 最初から通らないと思ってましたから。  
野本 ……ま、実際問題難しいですからね。  
三塚 ええ。間違いなく、僕がやりましたから。自分がやってしまったことですから。  
野本 で、それでですね、再審請求は諦め……。諦めまして、ただ、一応もう一つやり方というか、  
三塚 恩赦ですか。  
野本 あ、はい、そうです。恩赦の申請という手続きもあるにはあるんですけども。  
三塚 いやまあ……。(笑)、いいです。  
野本 ……そうですか。やるだけやってみてもいいですけど。  
三塚 「恩赦」って、要はどういうことなんですか？  
野本 あーっと、つまりですね、ま、色々あるんですけど……。三塚さんの場合ですと、ものすごく簡  
単に言ってしまうと、本人は十分反省しておりますので、  
三塚 どうかご勘弁下さいということですか。  
野本 まあ、そうです。許してくれと。  
三塚 何をですか。  
野本 え？  
三塚 許すって……。人を殺したことをですか。  
野本 はい。  
三塚 とにかく、いいです。  
野本 ……そうですか。分かりました。  
谷田部 面会終了です。  
野本 あ、はい。  
三塚 今まで、ご苦勞様でした。お世話になりました。  
野本 いえ、こちらこそ。ではまた、何かありましたら。  
三塚 はい。

三塚立ち上がり一礼する。野本も立ち上がり、

……。お元気で。

三塚、困ったような表情を見せ、もう一度、野本に向かって一礼する。  
野本、大きく溜め息を吐き、去る。

## しんじゃうおへや

三塚  
何するんですか。

谷田部、やにわに三塚を蹴り飛ばす。と、拘置所内の一室へと変わる。

谷田部、なおも無言で三塚を蹴ったり、踏みつけたりする。

三塚  
（たまたらず）やめて下さい……。  
谷田部  
何をだ？  
三塚  
……何ですか。  
谷田部  
この会議室はほとんど使われてない。だから、誰も来ない。ゆっくりと、話せる。  
三塚  
何をですか。  
谷田部  
座れ。

谷田部はイスを壁際に置き、三塚は促されるままにそのイスに座る。

谷田部  
再審請求はやめるのか。

三塚  
はい。

谷田部  
どうして。

先ほど野本先生も仰ってたとおり、新しい証拠も証言も出てきませんし、何より、実際私がやったことには変わりありませんから。これ以上、執行を引き延ばしても仕方ありませんから。ふーん。

元々、自分から望んで再審請求してたわけでもありませんし。

三塚  
だから？

谷田部  
え？

三塚  
だからどうしたんだよ。

谷田部  
どうって……。

三塚  
小栗課長に聞いた。

谷田部  
え？

三塚  
お前がこの拘置所に入った頃のことだ。

谷田部  
はあ。

三塚  
ずいぶん、荒れてたらしいな。

谷田部  
ええ。

三塚  
今はすっかりおとなしく変わっちゃったみたいで。いつからだ？

谷田部  
さあ。はっきりとは憶えてません。

三塚  
……俺は、信じない。そう簡単に犯罪者の本質は変わらない。

谷田部  
そうですか。

三塚  
深く自分の犯した罪を受け入れました。死刑執行を待ち続ける日々を受け入れました。で？ それでどうしたんだよ。それが何なんだよ。何なんだ！

三塚  
……。

三塚  
まさか、そうすることで自分が少しでも許されると思ってるわけじゃないだろうな？

谷田部  
いえ、そんな。

三塚  
お前は許されない！ 一生！ いや、死んでもだ！ 死刑が執行されても許されない！ 三塚孝という男がこの世にいて、殺人を犯したという罪は、その記録は二度と消えることはない！ 三塚分かっています。

三塚  
お前が殺した被害者、その家族、友人、恋人たちは、絶対にお前を許すことはない！ お前がどんなに辛い環境に育ってきたとしても、それが他人の命を奪っていい理由にはならない！ 分かっています。

三塚  
嘘をつけ！

谷田部  
……嘘ではありません。

三塚  
お前は自分が死を受け入れたことに自己満足を感じてるだけだろ。

谷田部  
……そうかもしれません。

三塚  
偽善だ。お前は何も分かっちゃいない。毎日のうのうと飯を食って、本でも読んで、怠惰な生活を暮らしているだけのお前らが反省？ ふざけるな。

三塚  
しかし、私にはそれしか出来ません。死刑という罰を受けて、それで償うしかありません。この世から消え去ることしか出来ません。

三塚  
もちろんそうだ。だが、俺は許せない。お前が、反省したふりをして、後悔したと錯覚して、それで満足して心安らかに死のうって魂胆が許せない。もっと苦しんで、苦しんで、苦しみ抜いて、死ね。

## しんじゃうおへや

三塚 ……  
お前には人権なんか無いからな。人権は「人」にこそ与えられる権利だ。他人を殺して、裁判によって死刑が確定したお前に、この国においてはもう人ではないと宣告されたも同然のお前に、そんな権利は無い！ ……害虫だ。お前はこの社会にとつての害虫だ。

三塚 ……  
虫が反省したふりしても所詮、虫だ。反省なんか無理だ。裁判官にも言われたらど？ 「被告は更正の余地無し」って……。苦しめ。害虫。

三塚 ……俺は、  
（激昂し）お前に、家族を殺された、大事な人を殺された者の苦しみ分かるか！  
じゃあ、お前は人殺しの気持ち分かるのか!?

谷田部 ……ん？  
人を殺した人間の、俺の心の中が分かるのかって聞いてるんだよ！  
……ほら、それがお前の本性だ。

三塚、突然谷田部の襟首に掴みかかる。谷田部はその手を引き剥がそうと抵抗し、三塚に攻撃を加える。だが、三塚は襟首を掴んだままそれに耐えている。  
そこへ、騒ぎに気づいた小栗が現れる。

小栗 ……何やってるんだ！

小栗は、谷田部を三塚から引き剥がす。

谷田部 ……何やってんだ！

（息荒く）話をしたら、いきなりこいつが掴みかかってきたんですよ。

……本当か？

本当ですよ。

（三塚に）本当か？

……すいません。

谷田部 ……これがこいつらの本性ですよ……殺人者の。以前、課長が言ってたとおりの暴れ者です。最近少しおとなしくしてただけでした。

詳しくはあとで聞く。ひとまず、行け。

課長、

いいから行け！

谷田部 ……

谷田部、不満気に立ち去る。

小栗 ……大丈夫か？

はい。

何を言われた？

別に、何でもありません。

何でもないこと無いだろ。

……なら、いい。すいません。

小栗さん。

ん？

……いつですか。

分からない。

来週ですか？

さあ。

来月になりますか？

分からないな。俺に聞かれても。

……あの、

（少し怒ったように）それ以上は言うな。

……

……

小栗、部屋を出て行く。

## しんじゃうおへや

三塚 いつ、来るんだろう……。

女がまた同じようにして現れる。

三塚 あ。

女 あ。

また、あなたですか。

三塚 ……。

やっばり、以前にお会いしたことがありますよね？

女 ここは私の部屋です。

三塚 それは分かりましたから！ どんどん会話が出来なくなっていく。そうじゃなくて、どこかで以前、お会いしましたよね？

女 お願ひ。

三塚 え？

女 近づかないで。許して。

女、ドアを開けて出て行くこうとする。だが三塚は、女が部屋を出るギリギリのところ  
でようやく女の腕を掴む。

三塚 さつきからなんで逃げるんですか！

三塚は女の腕を引っ張り、引き込む。勢いで倒れこむ女。  
が、よく見るとそれはさつきとは別の女である。上体を起こし、じっと三塚を見る。

三塚 あれ？

別の女1 ……。

三塚 ……どなたですか？

別の女1 すいません、

三塚 分かりませんか？

別の女1 え、はい。

三塚 ひどい。

別の女1 あ、すいません、えっと……どこかでお会いしましたっけ。

三塚 はい。

別の女1 どこですか？

三塚 思い出せませんか？

別の女1 ……えーと……

三塚 ひどい。

別の女1 いや……。

と、開いているドアから、また別の女が現れる。

別の女2 では、私は？

三塚 え……？

別の女2 私は憶えてますか？

三塚 ……えーと。

別の女2 憶えてますか？

三塚 …………すいません、分かりません。

別の女2 ひどい。

別の女1 ひどい。すいません。お二人はお知り合いですか？

三塚 すいません。お二人はお知り合いですか？

別の女達 いいえ。

三塚 そうですか……あの、本当にお会いしたことがありますか？

別の女達 はい。

三塚 ……。すいませんけど、私、別の女性を捜しているんです。さつき、こつちの方へ来たと思う

別の女1 ……知りません。

三塚 本当に知らないのか？

## しんじゃうおへや

別の女1 知りません。私のこと、覚えてませんか？

三塚 いや、覚えてないって！

別の女1 ひどい。

三塚 ひどいって、しょうがないだろ、覚えてねえもんは！ (別の女2に向かい) お前も知らないのか？ さっきの女のこと。

別の女2 それより、私のこと、覚えてないんですか？

三塚 うるせえ！ お前のことなんか知らねえよ！

別の女2 ひどい。

雨音が聞こえ始める。

三塚

……ひどい？ 俺がひどい？ 当たり前だ。殺人者だ、俺は！ 人を殺した俺に向かってひどいもクソもねえよ！ 俺は死刑囚だ。独房で死刑をただ待っただけの死刑囚だ。抹殺されるんだこの国に！ いや、ここに連れてこられた時点で社会的には抹殺されたと同じことだ。半分死んでるんだよ、俺は！

別の女達

……。

三塚 出て行け！

暗転。土砂降りの雨が降る。

やがて雨の音は止み、薄く明かりが点く。神父(教誨師)の嘉村が三塚の横にいる。

嘉村

三塚さん。

三塚

出て行け！

嘉村

三塚さん。

三塚

今日は一人にしてくれ！ 帰ってくれ！  
せっかくの教誨の時間です。ほんの少しでも構いませんから、お話ししましょう。今日は聖書の話ではなく、三塚さんの話をお願いします。どんなお話でも聞きますから。

三塚

……帰れ。

三塚

三塚さん。  
出て行ってくれ。

嘉村は、椅子を向かい合わせに置き直し、

嘉村

お座り下さい。

三塚

……。話しづらいのであれば、向こうの方を向いています。

嘉村、身体を外側に向け、三塚から視線をそらしながら椅子に座る。

嘉村

ひとまず、そこに座って。

三塚、しげしげ椅子に座る。

嘉村

座りましたか？

三塚

ああ。

嘉村

それでは、どんなことでも構いません。何でもいいですから、三塚さん自身のことを話して下さい。

三塚

……。

嘉村

では、例えば、子供の頃のことなんかどうですか？ 友達のこととか、印象に残ってる先生のこととか、何でも結構です。

三塚

……。何でも結構ですよ。

長い間。

三塚

……。……小学校が、

嘉村

はい。

三塚

小学校が、廃校になったんだ。

## しんじゃうおへや

嘉村 三塚 廃校。  
嘉村 三塚 小学校、田舎の小学校で、小さい、最後まで全部で十四人しかいなかった、ほんと下田舎のぼろ  
嘉村 三塚 い小学校で、木造の、それがさ、確か小学校四年生の時にさ、廃校つてなって。  
嘉村 三塚 ええ。  
嘉村 三塚 それで、別の離れた小学校に通うことになって。そっちは立派な鉄筋コンクリートのさ、白い  
嘉村 三塚 校舎でさ、  
嘉村 三塚 はい。  
嘉村 三塚 そっちに通うことになって……。  
嘉村 三塚 はい。それで？ どうでした、新しい学校は。  
嘉村 三塚 ……クラスも40人くらいいてさ、  
嘉村 三塚 ええ。  
嘉村 三塚 ……あのさ。  
嘉村 三塚 はい？  
嘉村 三塚 こんな話聞いてどうすんだ？  
嘉村 三塚 ただ、三塚さんのことを知りたいだけです。それだけです。  
嘉村 三塚 知ってどうするんだ。  
嘉村 三塚 どうもしません。ただ、知りたいだけです。  
嘉村 三塚 ……。  
嘉村 三塚 続き、お願いします。

間。

三塚 三塚 ……最初は、転校した頃はさ、なんか、新しい友達もいて、学校も新しいしき。  
嘉村 三塚 楽しかったですか？  
三塚 三塚 うん。  
三塚 三塚 そうですか。  
三塚 三塚 なんだけど、楽しかったんだけど、だんだん……だんだん……  
三塚 三塚 だんだん？  
三塚 三塚 だんだん……。  
三塚 三塚 前の学校が恋しくなりましたか？  
三塚 三塚 ……いじめられるようになった。  
三塚 三塚 ……はい。  
三塚 三塚 よくある奴だよ。教科書とか上靴とか隠されたり、運動着、便所に捨てられたり、無視とか、  
嘉村 三塚 俺が触ったもの触らないとか。触ったら汚ねえつてなるとか。  
三塚 三塚 それはどうしたんですか？  
嘉村 三塚 学校行くの止めた。  
三塚 三塚 ……なぜ、いじめが始まったんでしょうか？  
三塚 三塚 ……よく分からん。でも、貧乏だったからだろ。服も汚かったし。風呂とかもあまり入ら  
三塚 三塚 なかったし。  
三塚 三塚 ……学校やめて、どうしたんです？  
三塚 三塚 十五の時からこっちに來て働き出すまでは、ほとんど家にいた。  
嘉村 三塚 家にいて、何をしました？  
三塚 三塚 ……何してたんだろう。テレビ見たり、落書きしたり……。  
嘉村 三塚 その頃、楽しみだったこととか、何かありますか？  
三塚 三塚 ……本当にそんなこと聞きたいのか？  
嘉村 三塚 聞きたいですよ。  
三塚 三塚 本当に聞きたいことって、そんなことじゃねえだろ。  
嘉村 三塚 どういうことですか？  
三塚 三塚 俺のガキの頃の話なんか聞いたってしょうがねえだろ。  
嘉村 三塚 そんなことありませんよ。

三塚、嘉村の腕を思い切り掴み、睨み付ける。

三塚さん、  
三塚 三塚 あんたが本当に知りたいのは、こんな話じゃなくて、俺が起こした事件のことじゃないのか。  
嘉村 三塚 三塚さん、  
三塚 三塚 俺がどうやって相手を殺したか。どうして殺したか。それを聞きたいんじゃねえのか！  
三塚さん、私が知りたいのは、あなた自身のことです。あなたがどういう人間で、どこから來  
てどこへ行くのか。それを知りたいだけです。

## しんじゃうおへや

三塚 どこへ行くか？ 俺の行く先は一つだけだろ！  
嘉村 もちろん、最後は皆同じです。皆、天に召されれば、神の御前に立つのです。  
三塚 ……やっぱり、帰ってくれ。  
嘉村 ……分かりました。

三塚 三塚、嘉村から手を放す。嘉村は一度去りかけるが、歩みを止めて再び話しかける。  
嘉村 ……三塚さん、少しずつで構いません。私にあなたのことを教えて下さい。  
三塚 早く行けよ！  
嘉村 ……あなたが私に全てのことを話してくれた時、それは恐らくあなたがあなた自身の罪を認め、受け入れた時だと思います。  
三塚 うるせえ！

三塚は喚きながら、嘉村に乱暴に掴みかかる。  
と、二名の刑務官がすぐにやってきて、三塚を抑える。  
嘉村、一礼し、去る。

三塚は刑務官によって連れだされ、地面に放り出される。刑務官達は椅子を一脚持って去る。

三塚はしばらく床に転がったまま喚き続けていたが、やがて静かになる。

三塚の居室。ドアが開き、小栗が入ってくる。

……おい。三塚。

……今日、教诲師の嘉村さんに掴みかかったらしいな。

……本来なら懲罰房送りになるところだが、今回だけは見逃してやる。だが、次またおかしなことをしたら、その時は分かっているな！ おい！ 聞いているのか？  
……。

小栗、しびれを切らして出て行こうとする。と、

(倒れたまま) ……いった。

(立ち止まり) ん？

……いつなんだ。

何がだ。飯か？

……いつ、俺は執行されるんだ。

(冷たく) 分からない。

来週か？

さあ。

来月になるのか？

分からないな。俺に聞かれても。

……答えろ。

何を。

……ここはどこだ。

……ここは拘留所だ。

俺は誰だ。

は？

俺は何で生きてる。

なんだ、俺をからかってんのか。

俺は何で今生かされてる。ここはどこだ。社会からも切り離されて、ただ死を待つだけのここはどこだ。ここは何だ。何をするとこらだ。

三塚。

三塚は小栗の方へ向き直り、

三塚 教えてくれ。  
小栗 何をだ。

## しんじゃうおへや

三塚 どうしたら早く死刑執行してくれる。  
小栗 ……  
三塚 どうしたら早く殺してくれる。  
小栗 落ち着け。  
三塚 裁判長にも言われた。「卑劣・残忍極まりない犯行、極刑を持って臨む以外に無い」。だったら早く殺せ。こんなところに何年も入っている意味がどこにある。早く殺せ！  
小栗 ……残念だが、俺にはその権限はない。執行の命令を下すのは法務大臣だ。  
三塚 だったら、大臣に伝えてくれ。  
小栗 俺には無理だ。  
三塚 じゃあ、俺が手紙を書く。直訴する。  
小栗 残念だが、そのような書面は許可されない。届けることも出来ない。  
三塚 なら、どうすればいい。  
小栗 ……お前に出来るのは、その日が来るのをただひたすら待ち続けることだけだ。  
三塚 ただ、待つ……？  
小栗 そうだ。

三塚、小栗の手を取り、

三塚 ……頼む……殺してくれ……。早く俺を殺してくれ……。死なせてくれ……。  
小栗 なぜ、そんなに死にたい？  
三塚 ……生きる必要がない。生きる喜びがない。生きる希望がない。生きる目的がない。生きる価値がない。俺には価値がない。俺の人生には価値がなかった。  
小栗 そんなことはない。価値のない人間なんかいない！  
三塚 なら、俺はなぜ死刑になった！  
小栗 ……。

三塚 答えられないなら、早く殺してくれ……。  
小栗 ……7年から8年。  
三塚 ……？

小栗 死刑が確定してから執行に至る平均期間は7年から8年だ。長ければ10年以上、30年以上執行されない者もいる。かと思えば中には1、2年で執行される者もいる。いつ執行されるかは、誰にも分からない。我々にも執行の2、3日前までは知らされない。

三塚 その時まで、俺は何をして過ごせばいい……。  
小栗 今のお前に出来ることは、お前がすべきことは、自分のやってきたことについて見つめ直すことじゃないのか。少しずつでも。  
三塚 ……。

小栗 そして、せめて、人間らしく死んで欲しい。  
三塚 ……やっぱり、だ。  
小栗 やっぱり？

三塚 俺は人間じゃない。  
小栗 違う。

人間じゃなかったら何だ。人殺しが人間じゃないなら何だ！

小栗 ……お前が人殺しなら、俺も人殺しだ。  
三塚 え？

俺は仕事で人を殺した。お前は勝手に人を殺した。それだけの違いだ。

三塚 違うだろ。俺たち死刑囚は人間じゃない。

小栗 そんな風に思えたらどれだけ楽か！ 人間でも動物でもない、意思の疎通が一切通じない、単なるタンパク質の固まりだと思えたらどんなに楽か！

三塚 何を

小栗 今、こうして言葉を交わして、お前の気持ちが少しでも分かっちゃったら、人間として扱えないじゃないか、俺は！ 死刑でいつ死ぬか分からないお前と、いつかどこかで事故か病気か何かで死ぬ俺と、どれほどの違いがある？ 俺も死ぬんだ！ 必ず！ だったら死ぬまで、できるだけのことを、何が正しいことか分からなくても、やるしかないだろう？ 生きるしかないだろう？

三塚 ……俺には、あんたの言ってることが分からねえよ。

小栗、思わず三塚の襟首を掴み、

小栗 お前は人間だ！ 人だ！

## しんじゃうおへや

にらみ合う二人。  
やがて三塚が、いきなり吹き出して笑い出す。

小栗 (釈然とせず) ……何だ。何がおかしいんだ。  
三塚 いや、すいません。なんか、わからないけど、必死な顔してたから笑っちゃって。すいません。  
小栗 何だよ、それ……。人が、真面目な話してる時に……。  
三塚 そうですよ。人がね(笑)。  
小栗 なんだよ、お前(笑)。  
三塚 すいません(笑)。

小栗、呆れたように三塚から手を放す。

三塚 ……久しぶりに笑った気がする。  
小栗 ……そうか。  
三塚 こんな時でも笑えるんだなと思って。人って。  
小栗 ああ。認めたな。  
三塚 え？  
小栗 「人」って。  
三塚 ……いや、  
小栗 あ。  
三塚 え？  
小栗 (手を開いて見せて) ボタン。  
三塚 え？  
小栗 お前のシャツの。  
三塚 (自分の襟首を探り) あ。取れてる。  
小栗 悪い。後で縫いつけてやる。  
三塚 お願ひします。  
小栗 じゃあ、行くからな。(部屋を出ようとする)  
三塚 ……あれ？  
小栗 なんだ？  
三塚 ……このボタン、ありません。  
小栗 いや、だから俺が今持つてるから。  
三塚 違います。  
小栗 違いますって、  
三塚 確かに、小栗さんにボタン取られて、でも、その後つけてもらって……。  
小栗 え？  
三塚 確かにつけてもらいました。でも、また、無くなってる……。  
小栗 ……。  
三塚 そうだ、この部屋に立ってたときにはもう、無くなって……。小栗さん、  
小栗 ……。  
三塚 ……。

三塚、小栗の手を取り、拳を開く。だが、その中にボタンは無かった。  
小栗 ……どこですか？  
三塚 ……。  
小栗 どこからともなく嘉村が現れる。

嘉村 三塚さん、  
三塚 え？  
嘉村 全てを話して下さい。  
三塚 え？  
嘉村 あなたの罪を懺悔なさい。  
三塚 え？

さらに谷田部が現れる。

谷田部 三塚孝、

# しんじゃうおへや

三塚 え？  
谷田部 教える。  
三塚 え？  
谷田部 お前が何を反省したのか。  
三塚 え？

野本が現れる。

野本 三塚さん、  
三塚 え？  
野本 当日あったことを話して下さい。  
三塚 え？  
野本 あなたを弁護しますから。  
三塚 え？

佐久間が現れる。

佐久間 三塚！  
三塚 え？  
佐久間 お前がやったんだろ？  
三塚 え？  
佐久間 お前が殺したんだろ？  
三塚 え？  
小栗 ……三塚、  
三塚 え？  
小栗 出るんだ。

三塚、恐る恐る、ドアを開ける。

三塚 開いた……。

と、入れ違いに女が入ってくる。同時に雨が降り始める。女の部屋。

三塚 あ。  
女 あ。  
三塚 ……えっと、  
女 え？  
三塚 いや。  
女 ビックリした。  
三塚 すいません。  
三塚 あの、え？ えーと……。  
女 すいません。  
三塚 誰ですか？  
女 え？ 僕ですか？  
三塚 いや、はい。  
女 あれ？ 管理人さんから聞いてないですか？  
三塚 ……。いいえ。  
女 このマンションの管理人さんをお願いしておいたんですけど。  
三塚 分かりません。  
女 分かりませんって、おかしいな……。  
三塚 ……誰です？  
女 え？  
三塚 すいません。あなたのこと分かりません。知りません。  
女 いや、点検に来たんですよ。  
三塚 何ですか？  
女 電気系統がいかれてるから見てくれって言われて、急遽言われたんで私服のまま来ちゃったんですけど、  
三塚 何言ってるんですか、さつきから。  
女 ……いや、ちょっと一緒にブレーカー見てもらえますか？（女の手を取ろうとする）

## しんじゃうおへや

女 やめて下さい。  
三塚 ……また、出直します。

三塚、ドアの方へと向かうが、直前で動きを止める。

間。

三塚、ドアを閉める。

女 ……行かないんですか？

三塚 鍵、かけました。

女 誰なんですか、あなた！

三塚 結構、いい部屋に住んでるね。

女 ……は？

三塚 俺も、ここに住もうかな。

女 ここは私の部屋です！

三塚 そうですよ。

女 そうですよ！

三塚 あなたの部屋ですよ。

女 私の部屋ですから！

三塚 ……誰にも言わないなんて約束できないよな。俺のこと見なかったことにするなんて。

女 さっきから変なこと言わないで！

三塚 (ポケットから三万円を取り出し) これ、返すから、なんとか、

女 近づかないで！

三塚、逃げ出す女を捕まえる。すぐに口を塞ぐ。椅子に押し付けるように座らせる。

三塚 騒ぐな。騒いだら、殺す。

女、必死に頷く。

三塚 持つてる金、全部出せ。

女、手持ちの財布から、金を出す。

三塚 部屋にあった三万円と合わせて、足したらいくらだ？ (手を放す)

女 五万、五万七千、五万七千二百六十三円、

三塚 (再び、口を塞ぎ) よこせ。

女、三塚にお金を差し出す。三塚は金を掴み、ポケットにねじ込む。

三塚 俺の目的は金だけだ。信用しろ。

女、頷く。

三塚 ……警察にも誰にも言わないか？

女、頷く。

三塚 誰にも言うなよ。

女、頷く。

野本 それから、どうしました？

三塚、女の口から手をゆっくりと放す。

三塚 ……。

## しんじゃうおへや

女、息は荒くしながら、ブルブルと震えている。

三塚、一步、二歩と、ドアの方へ歩いていく。女、静かに振り返り、様子を盗み見ると、三塚もふと転女の方へ向き直り、二人の目が合う。

三塚、猛然と女へと突っ込んでいき、女を床へ押し倒す。馬乗りになる。

女  
三塚  
……。  
(かすれるような声で) お願い……。

佐久間、懐から証拠である凶器のナイフの入ったビニール袋を取り出す。

佐久間  
これが、凶器だな？

佐久間、ナイフを袋から取り出す。

女  
お願い……。

以降、三塚は佐久間・谷田部の台詞に従って動く。(手にはナイフは持っていない)

佐久間  
お前はこのナイフを右手で固く握りしめ、その拳を真上にゆっくりと掲げ、

女  
お願い……。  
先端部を叩きつけるように、拳を斜め下方向へと力強く振り下ろした。

谷田部  
女  
そして再び、ナイフを右手で固く握り直し、その拳を真上にゆっくりと掲げ、

女  
お願い……。  
先端部を叩きつけるように、拳を斜め下方向へと力強く振り下ろした。

佐久間  
女  
真上に掲げ、

谷田部  
佐久間  
叩きつけるように振り下ろした。

佐久間  
ゆっくりと掲げ、

谷田部  
力強く振り下ろした。

佐久間  
掲げ、

谷田部  
振り下ろした。

佐久間  
掲げ、

谷田部  
振り下ろした。

野本  
三塚  
その時に、被害者の女性は何か言いましたか？

三塚  
言いました。

女  
お願い……。

三塚  
お願い……。

女  
許して……。

三塚  
許して……。

女  
お願い……。

三塚  
お願い……。

女  
許して……。

三塚  
許して……。

嘉村  
三塚  
その時の気持ちを覚えていますか？

覚えています……覚えていますが、うまく言葉に出来ません。いい気分でも悪い気分でもありませんでした。ただ心の中にもやもやしたものが、覆い被さって、自分が何をしたのか、どう

いうことをしたのか、よく分かりませんでした。

それで、二人目、三人目を殺そうと思っただけですか？

はい。そのもやもやの正体を知りたかったんです。二人目も三人目も同じように殺しました。

野本  
三塚  
別の女1・2が現れる。

別の女1・2が現れる。

佐久間  
谷田部  
佐久間  
掲げ、  
振り下ろした。  
掲げ、  
振り下ろした。

## しんじゃうおへや

谷田部

振り下ろした。

嘉村 その時の気持ちは覚えていますか？  
あまり覚えていません。

三塚

ひどい。

別の女1

ひどい。

別の女2

ひどい。

三塚

ただ、

野本

ただ？

三塚

二人から奪ったお金の額は覚えていません。二人目が一万四千三百七十円、三人目が三万三千五百十九円。覚えているのはそれだけです。

別の女1

ひどい。

別の女2

ひどい。

野本

それで、その「もやもや」は消えましたか？

三塚

消えませんでした。ですが、お金のことしか憶えてない自分は、そうやって人をお金でしか判断できない自分はずっと最低の人間なんだと思いました。そして、お金を一銭も持っていないか

野本

今もそのもやもやは？

三塚

……残っています。

野本

許して……。

三塚

許して……。

女

許してくれ……。

三塚

許してくれ……。

佐久間、三塚にナイフを握らせる。

嘉村

……彼の罪をお許し下さい。

女

許して……。

三塚

許してくれ……。

女

許して……。

三塚、「許してくれ」と連呼する。

女

「許して」と連呼する。

三塚

……許してくれ……。

女

……どうして？

三塚、ナイフを思い切り振りかぶる。

と、突然ドアの鍵が開く音。ドアが開き、電気工事の福山、岩上、高橋が入ってくる。

高橋

失礼します。

岩上

(福山を押しながら) 早く行って、早く行って、早く行って、早く行って！

福山

押すな！

岩上

だって、怖いんだもん！

福山

だって、余計押すな！

岩上

だってだってだって、

福山

うるさい！

岩上、ふてくされたように黙る。

三塚、入ってきた三人を見ていたが、

三塚

……誰だ？

高橋

(ふと) え、なんか聞こえませんでした？

岩上

え。

福山

シツ！

高橋

なんか聞こえた！

岩上

嘘！

福山

うるさい、ほんとに！

高橋

ほんとに聞こえたんですって！

三塚

お前ら、誰だ？

福山

じゃあ、無視して下さい。

高橋

……はい。

## しんじゃうおへや

福山 (天井を見て) あ、アレか。

三塚、立ち上がる。

岩上 ……あれ？

岩上、床に落ちているボタンを拾い上げる。

岩上 こんなところにボタンが。

何でも思ったこと口に出すの止めなさい。

……。

三塚 そのボタンは……。

三塚、自分の襟元を触る。

女、立ち上がる。

三塚 ここは……どこですか？

女 ここは……

女、天井を指さす。

三塚 ……そうか。

天井の踏み板が勢いよく閉まる。

部屋を暗闇が包む。

終